

むかし、のちの江戸はまだ広い沼地でしたから、都から北へ行こうとすると、どうしたつて下総を通らずにはおれないのでした。今でこそ、東京から千葉はひとつづきの都市です。ところが、当時は人口もずっと少なく、移動は徒歩か馬です。長い長い距離を歩いて、例えば真間の入り江にさしかかった旅人は、こんもりとした森の間に突如現れる甍の波にたまげたことでしょう。

甍の波の正体

旅人が目にした(であろう)甍の波は、下総国の国府です。国府、という県庁のようなものと思いきや、さにあらず。実は、県庁に当たる「国庁」、官庁街にあたる「国衙」、「津」(船の渡し場)、「駅家」、「市」まで含んだ広い範囲を指していました。旅人が「なんか町に入ったぞ」と思うところはすでに国府なのです。

国庁では都から派遣された「国司」が国を治めていました。有名な大化の改新(645年)から始まった中国風の中央集権制度です。国庁は今のスポーツセンターの野球場あたりにあり、すぐそばには古代の東海道(ほぼ今の松戸街道)が走ります。もっとも広いところでなんと13~16mもあり、北へ抜ければ、常陸国さらには陸奥(東北地方)へつながる大動脈でした。そして、国府が安定した奈良時代後半~平安時代初めには、東北地方を征服しようと「征夷」の軍勢が陸奥へ向かって駆け抜けていったのです。宮廷文化が花開いていた都とはまったく違う時代の姿がそこにはあります。



和洋女子大学東館 / 85M

七重の塔 / 60M

異空間をつくりだす



宝相華文

聖武天皇の詔(741年)によって各地で開始された国分寺・国分尼寺造営は国の威信をかけた大事業。庶民の家は草葺の時代に、瓦葺で木の部分は赤、壁は白、といういでたちで日常とはかけ離れた異空間をつくりだしました。高さは推定60m。現在の和洋女子大東館の6割に相当します。森の中に突如として現れる巨大な塔は旅人の度肝を抜いたことでしょう。

国分寺造営は聖武天皇が深く仏教に皈依したため行われましたが、一方で国の威光を誇示するためでもあったようです。もともと仏教は外来のものです。日本に定着するには壮麗な寺院で民衆のこころをつかむ必要がありました。例えば、下総の国分寺だけの特色に瓦に刻まれた「宝相華文」という文様があります。都で流行の文様だったとか、朝鮮半島を統一した新羅から入ってきたとか、諸説あります。いずれにせよ、最先端の流行を取り入れる様子は、当時、仏教が斬新な存在だったことを教えてくれます。

残念ながら昔の旅人のような驚きは、たくさんの住宅が建ち並ぶ現代に暮らしていると味わえないものです。とはいえ、国分・国府台地区にはまだまだ深い森や古い道がそこかしこに残されていますから、空想をたくましくしていると、半分くらいはあの驚きを味わうことができるかもしれません。

文化の街かど回遊マップ

国分・国府台地区編

国分・国府台地区の歳時記



1月17日
厄除け行事「辻切り」
天満宮



3月上旬
梅まつり
じゅん菜池緑地



3月下旬~4月上旬
桜の見ごろ
里見公園



5月下旬~6月・10月~11月
バラの見ごろ
里見公園



10月15・16日
日枝神社祭礼



10月~12月
紅葉シーズン
里見公園

国分・国府台の成り立ち

- 先土器時代・縄文時代**
約25,000年前から人が住みはじめる。海面が今より高く、のちの台地上にたくさんの貝塚がつくられる。
- 弥生時代・古墳時代**
稲作がはじまり、周開を溝で開いた環濠集落がつくられる。6世紀ごろから豪族が力をつけ、明戸古墳、法皇塚古墳など前方後円墳が築かれる(国府台古墳群)。
- 飛鳥時代~平安時代**
国府台に下総国の国府が置かれ(7世紀後半)、聖武天皇の詔(741年)によって、国分に国分寺・国分尼寺が建立される。古代の東海道が通る要衝の地として栄える。
- 鎌倉時代~戦国時代**
千葉常胤、太田道灌など武将たちが活躍。戦国武将北条氏と里見氏が2度に渡り国府台合戦を繰り広げる。
- 江戸時代**
戦いの時代が終わり、太平の世に。総寧寺が閑宿から移転してくる(1663年)。
- 明治時代~大正時代**
陸軍教導団の国府台移転(1885年)を発端に、太平洋戦争終結まで軍隊の町となる。
- 昭和時代~平成**
昭和9年(1934年)の合併で市川市が誕生。太平洋戦争終結(1945年)後、陸軍用地はスポーツセンターや各大学に様変わりし、今に至る。

一 里見公園

江戸川対岸からも望める市川を代表する公園。園内には市川市の最高標高点があります。とくに桜の名所として知られていますが、四季それぞれに藤や紅葉なども楽しめます。南側は噴水や花壇を中心とした西洋式庭園となっており、バラ園にはオリジナルのバラ「ローズいちかわ」をはじめバラの品種が豊富に植えられています。北側は鬱蒼とした常緑樹の森で、数々の遺跡がひしめく歴史スポット。6世紀後半の豪族の墓とされる明戸古墳や太田道灌が築いた国府台城址があります。堅固な砦で、徳川家康は「険要なり」と切り崩させたそうです。北条氏と里見氏が激しく戦った国府台合戦の舞台でもあり、「里見諸将霊墓」や「夜泣き石」など敗れた里見方にまつわる遺跡がいくつもあります。

管理事務所 住所●市川市国府台 3-9 ☎047-372-0062

二 羅漢の井

里見公園内にある古井戸。真言宗の開祖、空海が住民のために探り当てたといわれています。国府台合戦の際は里見軍の飲み水として利用されました。のちの江戸時代には飲み水の不足に悩んだ総寧寺の僧侶が十六羅漢に祈祷して井戸水を湧き出させたとの伝説もあります。

三 紫烟草舎

詩人・北原白秋が江戸川区小岩で詩作をしていた建物です。江戸川の改修工事で解体されたままだったのを白秋ゆかりの市川に再現したものです。真間の亀井院に一時住んでいた白秋は小岩に移ったあとも江戸川から望む市川の景観をこよなく愛していたそうです。近くには歌碑も建てられています。

四 総寧寺

遠く滋賀県で創建され下総に移された曹洞宗の古刹。当初は閑宿にありましたが、洪水を避けるため国府台へさらに移転しました。江戸時代には6万7千坪の広大な寺領を誇りましたが、明治に入ると大学用地(後に陸軍用地)として接収され、現在の位置に落ち着きました。

五 天満宮の辻切り

太田道灌建立とされる神社です。元は法皇塚古墳の上に立っていました。ここを舞台に行われる「辻切り」行事は市指定無形民俗文化財で、ワラでつくった大蛇にお神酒を飲ませて魂入れし、国府台の四隅の木にくくりつけます。これにより集落に入ってくる悪霊や病気を大蛇の霊力で追い払うことができると言われています。

六 里見公園前の桜並木

松戸街道と里見公園を結ぶ300mほどの桜並木。整然と並んだ桜が咲くさまは大変美しく、ちょっとした散策にぴったりです。

七 姫宮

戦国時代の国府台合戦で、敗れた里見方の姫がじゅん菜池に身を投げたのを里人が憐れんで祀った祠といわれています。

八 じゅん菜池緑地

かつてじゅん菜がたくさん生えていたことからこの名があります。現在のじゅん菜池は戦後の食糧難のため田んぼになっていたものを再び緑地として整備したものです。緑地では四季折々の花や紅葉が楽しめるお茶室も利用することができます。

管理事務所 住所●市川市中国分 4-27 ☎047-371-1254